

氏名(本籍)	いわさき 岩崎	たかし 賢(佐賀県)
学位の種類	博士(文学)	
学位記番号	博甲第3575号	
学位授与年月日	平成17年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
審査研究科	哲学・思想研究科	
学位論文題目	メシーカ人の供犠の宗教学的的研究 -解体と確立-	
主査	筑波大学教授	文学博士 山中 弘
副査	筑波大学教授	Dr. phil.・博士(文学) 佐久間 秀 範
副査	筑波大学教授	博士(宗教学) 津 城 寛 文
副査	筑波大学助教授	博士(文学) 塩 尻 和 子
副査	筑波大学助教授	Ph. D. 木 村 武 史
副査	筑波大学助教授	Dr. phil. 小 野 基

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、16世紀スペイン人征服以前におよそ25万の人口を擁する最大規模の都市国家テノチティトラを築いたメシーカ人(アステカ人)の供犠の儀礼と神話を、「解体」と「確立」という一貫した視点から考察を試みようとしたものである。本論は、結語を除いて五章からなっており、第一章で、本論全体の視点たる供犠の過程における「解体」と「確立」という概念について論じ、それを踏まえて、第二、三章は「解体」の側面から、第四、五章は「確立」の側面から、メシーカ人の供犠と儀礼が論じられ、最後に今後の展望が語られるという構成になっている。以下、各章ごとに、もう少し詳しくその要旨をみよ。

第一章では、供犠にまつわるメシーカ人の多様な神話と儀礼の中に、一貫した構造的連関を見出すための枠組みとして供犠の過程という概念を提示する。第一節と第二節では、供犠の定義を提示したうえで、タイラー、フレイザー、ロバートソン・スミス、ユベールとモース、フロイト、ジラルルなど、これまでの主要な供犠論がどのように展開してきたかを概観している。第三節と第四節では供犠の過程を主体解体と主体確立という二局面からなる過程として解釈しようとする。すなわち、著者によれば、供犠において供犠祭主(供犠執行者)は供犠対象(生贄・犠牲獣)と融合しているために、供犠対象の破壊は、死そのものの直接的衝撃によって日常的様態における供犠祭主の破壊を引き起こすことになるという。しかし、これはイニシエーション的構造を有しており、供犠の過程とは、死=主体解体がそのまま新たな「方向付け」=主体確立の成就であるという逆説的出来事である、と理解される。

第二章では、この供犠の過程における主体解体の局面を明らかにすべく、これをメシーカ人における「食」の宗教性という点から論じる。第一節と第二節では、その神話に類出する「神が人を食べる」という主題に注目し、供犠を神にエネルギーを付与する行為であるという従来の研究を機械論的であるとして批判する。第三節と第四節では「人が神を食べる」という性格を示す儀礼等に注目し、メシーカ人にとって「食べる」という行為は単なる栄養補給以上の意味を持ち、食べるものと食べられるものとの間に親密な絆を打ち立て

る試みであると指摘する。「神が食べる」という主題は恐怖と苦痛の中で主体が解体されることの表現として、また人が神の体を食べるという主題は主体が日常的存在様態を脱出することの表現としてそれぞれ解釈することが可能であり、いずれも供犠の過程の一端を明らかにするものであることが示されている。

第三章で著者は、メシーカ人の宇宙論において、人間は、家、都市、そして天空と大地からなる大宇宙と共通した構造を持ち、相互に照応し合うマイクロコスモスとマクロコスモスの関係にあったという点から、都市崩壊の神話や儀礼を取り上げて、それが身体崩壊（死）という出来事の実存的様相と不可分であるとしている。第一節と第二節では、この都市崩壊の神話は、しばしば身体における頭部の異常（破壊や腐敗）という主題を示すこと、そしてそれがメシーカ人の身体論では頭部は宇宙の時間的秩序と緊密に結び付いており、マイクロコスモスとしての身体はこの部分の異常は、宇宙全体が崩壊の時を迎えたことの表現であることを示す。第三節と第四節では、都市崩壊の儀礼として「新しい火の祭り」、及びスペイン人到来時のテノチティトランの人々についての記述を取り上げて、そこで都市の死に際して人々が陥る実存的情况を見ることで、メシーカ人における死の体験の様相、つまり供犠における主体解体の様相を理解しようとしている。

第四章では、供犠の過程における主体確立の局面を明らかにすることに努めている。第一節と第二節では、まずウィツィロポチトリ誕生神話を取り上げ、考古学の成果をふまえて、それが都市国家としてのテノチティトランを根底から支えていた神話であることを指摘する。そしてパンケツァリストリの祭祀において為される供犠は、太陽神ウィツィロポチトリによる月神コヨルシャウキと星神センツォン・ウィツナワの殺戮という神話的出来事を再現するものであることが示される。第三節と第四節では、いわゆる原初巨人解体神話を「儀礼的供犠により実現された非業の死のみが創造的である」とするエリアーデの議論に拠りつつ、ウィツィロポチトリ誕生神話はまさにこの巨人解体型の神話であること、また同じ主題は、10世紀以降に北部から移住してきた小部族であるメシーカ人が、いかにしてテノチティトランを見出したかという神話にも明瞭に認められることを示す。テノチティトランという宇宙を生きる人々が、いかにして供犠において宇宙創成の出来事に参与し、根源的に「方向付け」られるのかを論じている。

第五章では、ウィツィロポチトリ誕生神話は敵対勢力の太陽神による一方的殺戮の物語であり、そうした神話的枠組みを基礎とした供犠は、本論で提示した、供犠対象と供犠祭主との融合という供犠過程の条件と齟齬をきたすのではないかと、という疑問に答える形で議論がなされている。メシーカ研究の重要なトピックである「花の戦い」を取り上げ、まず第一節と第二節では従来の代表的議論を検討して、それらがいずれも「花の戦い」というものが制度的歴史的実体として存在していたと考え、結果として「花の戦い」なるものの起源や制度の具体的有り様の議論に終始していることを指摘する。第三節と第四節では、「花の戦い」なる制度的構築物はそもそも存在せず、むしろ「花の」という語が、戦い全般に有するある宗教的次元のことを形容する語として用いられたのではないかとという視点を提示し、この形容語に関するいくつかの事例を再検討したうえで、戦いの神であるテスカトリポカ＝ウィツィロポチトリ神に命を捧げた過酷な戦いをメシーカ人は優れて「花の」と形容したらしいことを示唆している。

審査の結果の要旨

本研究が考察対象としている、メシーカ人（アステカ人）の都市国家テノチティトランの供犠は、複雑な神話的儀礼的枠組みの中で、本論で詳述される「新しい火の祭り」などの特別な機会に行われ、その内容も、斬首、溺死、矢の射かけ、剣闘士としての戦闘など非常に多様な形態をとっていた。本研究の第一の学問的貢献は、宗教学、人類学、社会学などの領域における供犠論の蓄積と、政治学、経済学、心理学、生態学などの視点からなされたメシーカ宗教に関する先行研究を踏まえながらも、いまだ全貌が明らかになっていない彼らの供犠と神話を、解釈学的手法を駆使して宗教学の立場から統合的に捉える視点を提示し、もってメ

シーカ人の宗教研究に新たな分析の視角を切り開いたところにある。著者は、供犠そのものが有する宗教的次元に迫るために、従来の供犠理解の根底にあった近代的行为観から供犠をいったん切り離して、それを主体解体と主体確立という二局面からなる過程として解釈する。これによって、供犠は単なる都市国家の定まった残忍な儀礼ではなく、人間と共同体の「死と再生」にかかわる優れたダイナミズムを有する行為として捉えられるようになった。もとより、この著者の視点は、宗教現象を「宗教体験」とその「表現」として捉える W・ヴァッハと、その伝統に連なる M・エリアーデのイニシエーション理論に大きな示唆を受けているが、それらの理論を著者の立場から十分に熟考したうえで、それらをメシーカ人の宗教的世界の全体的構造連関を明らかにする視点として改めて再構成しており、著者のオリジナリティを強く感じさせるものとなっている。

第二に、このメシーカ人の宗教的次元の存在の闡明は、単なる狭義の供犠儀礼の意味解明にとどまらず、これまで十分に解明されてこなかったパンケツァリストリの祭祀のもっていた意味の理解をもたらしている。すなわち、その祭祀の中心であるウィツィロポチトリ誕生神話に代表されるテノチティランを支える神話の儀礼的再現はこの都市国家のコスモロジーの新たな更新を約束するものであったのであり、メシーカ人たちの供犠が壮大で精緻なコスモロジーと深く関わっていたことを明らかにしている。

第三に、著者は、当時の最も重要な歴史的資料の一つであるナワトル語で書かれた『ナワトル詩歌集』に現れる「花の」という形容詞の意味内容を丹念に検討することを通じて、「花の戦い」が捕虜獲得のための特別な戦争だというこれまでの定説に疑義を呈し、戦いの神であるテスカトリポカ＝ウィツィロポチトリ神に命を捧げた過酷な戦いを彼らは「花の」と形容したのではないかという新たな仮説を提示しており、好戦的とされるメシーカの人々の戦争観の再検討に一石を投じる重要な問題提起だと考えられる。

以上のように本論文の成果は高く評価できるものであるが、若干の問題も残されている。特に、著者が用いた歴史的資料の問題がある。著者は、第5章を除いてメシーカ人の言語であるナワトル語の第一次資料を必ずしも十分に使っているわけではなく、その論述の基礎資料としてスペイン語訳のものを多く使っている。これは、解釈学的方法から供犠の過程を内在的に描こうとする著者の解釈が十全な説得力をもつことを妨げる可能性を持っているように思われる。もとより、歴史的資料の問題はメシーカ人に関わる考古学的資料と歴史的資料が極端に不足していることに不可分に関わっている。しかし、限られた歴史的資料を解釈する際に、資料と解釈図式の慎重な扱いは重要であり、恣意的な読み込みの介在の可能性にも周到に配慮すべき箇所も若干見受けられた。

しかし、これらの問題は著者の本論での優れた学問的貢献を何ら減ずるものではない。本論は、宗教学的視点から、未開拓の学問領域であるメシーカ宗教研究に果敢に取り組み、その供犠と神話の理解においてこれまで十分に考慮されることのなかった彼らの宗教的次元を生き生きとした筆致で明るみに出したことはメシーカ宗教研究の進展に大きく寄与するものであり、この領域における著者の学問的貢献は特筆すべきものがある。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。